

カネテ考

我妻 多賀子

一 はじめに

現代語には、左のように用いるカネテがある。

① 会が円滑に運ぶように、かねて準備しておく。

② 大雨になるとかねて知っていれば、出かけなかつたのに。

右の二例は、いずれもある事を基準として、それが起こる前の時点を漠然と示し、意味的には「事前」「前から」

「あらかじめ」などとなる。また①では、カネテが「準備しておく」に、そして②では「知っていれば」にかかるので、いずれも副詞であり、表記は現代仮名遣いでは仮名書きになる。

ところで、このカネテは、下一段活用動詞カネル（古語では下二カヌ）の連用形に接続助詞のテが付いて成ったものという。そして、現代語では、動詞カネルは、カネテの形としては、左のように使われる。

③ この部屋は、居間と寢室をかねている。

④ 人手不足なので、会計と書記をかねてほしい。

⑤ 出かけようか出かけまいか、決断しかねている。

③は、「一つで二つ以上を」「合わせ持つ」「一緒にする」意で、それが特に本務以外の仕事のことにあぶと、④の「兼職する」の意になる。⑤は、必ず動詞の連用形の下に付いて用いられ、「……しようとしてもできない」「……していることに堪えられない」の意を表し、

⑤ これは捨てかねてとっておいた本です。

⑤ 見るに見かねて口を出した。

など類例も多い。すると、これら動詞のカネルの用法のうちのどれと、副詞カネテはつながっているのだろうか？ あるいは、動詞カネルには、古く他の用法があったのだろうか？ そして、副詞カネテはずっと「事前に」「あらかじめ」の意味だけで使われていたのだろうか？ また、動詞カネルや副詞カネテはいつごろから用いられるようになったのであろうか？ そんないくつかの疑問点を解明すべく、今号では、副詞カネテを中心に、上代・中古・中世と、その

意味・用法の変遷を追ってみることにしたい。(注1)

二 上代

この期を代表する『万葉集』には一字一音書きの副詞カネテが二例ある。

○かくばかり恋ひむとかねて『可祢』 知らませば味をば見ずそあるべくありける

△一五・三七・三九

○かからむとかねて『可祢』 知りせば越の海の荒磯の波も見せましものを

△一七・三九・五九

○堀江には玉敷かましを大君を御船漕がむとかねて『可年』 知りせば

△一八・四〇・五六

いずれも似たような使い方で、カネテがある部分は「前もって知っていたら」「あらかじめ分かっていたら」の意になり、カネテは先に挙げた現代語の②の用法と同じである。

『万葉集』には、他に二例、漢字「豫」で表記されたカネテがある。

○…言はまくも ゆゆしくあらむと あらかじめ かねて『豫』 知りせば…

△六・九四八

○あしひきの山の下風は吹かねども君なき夕はかねて『豫』 寒しも

△一〇・二三・五〇

最初の例は、前掲の一字一音書きのカネテと同様な使い方、現代語の②に相当し問題はない。次の巻一〇の例は「山おろしの風は吹かないけれども、あなたがいらつしやらない夜は、前から寒く感じます」となり、先に挙げた現代

語の①と同じになる。つまり、『万葉集』には、副詞カネテが五例あるが、いずれも「あらかじめ」「前から」の義を表し、時間的に前のことを指す点で共通している。(注2)

次に動詞カヌの連用形に接続助詞テの付いたものは、いわゆる連語であるが、『万葉集』の例を、現代語の用法と比べながら見て行くことにしたい。とりあえず、一字一音書きのカネテは見当たらなかった。

まず現代語の③に相当する「合わせ持つ」「一緒にする」意のカネテには、左の三例が挙げられる。

○眞玉つくをちこちかねて「兼手」言はいへと逢ひて後こそ悔にはありと言へ
△四・六七四▽

○あらたまの年月かねて「兼而」ぬばたまの夢にそ見ゆる君が姿は
△二・二五五六▽

○眞玉つく遠近かねて「兼而」結びつるわが下紐の解くる日あらめや
△二・二九七三▽

巻四と二二のあとの方の例は第一句までが全く同じであるが、「眞玉つく」は「玉をつける緒」の意から「緒(ヲ)」にかかる枕詞で、この場合はヲチコチのヲにかかっている。ヲチコチは「将来と現在」の意なので、その二つを「一緒にして」「…にわたって」の義となる。

もう一つの巻二二の例も「年と月」という二つのものに同時に力を及ぼしているところから、「…にわたって」の意となり、このグループに含めて考えられる。

さらに、『万葉集』の連語カネテには、他に左のような例がある。

○…生れまさむ御子のつぎつぎ天の下知らしませと八百万千年をかねて「兼而」定めけむ平城の京師は
△六・一〇四七▽

かぎろひの春にしなれば…

△六・一〇四七▽

○眞玉つく遠をしかねて「兼」思へこそ一重衣を一人着て寝れ

△二二・二八五三▽

初めの例は、部分的に「千年先をも予定して」、次の例は、また枕詞の「眞玉つく」を使用しているが、この場合には「遠（ヲチ）」のみにかかり、「将来を思うからこそ」の意となる。よってこの二例は、異なった二つのものを「合わせ持つ」の意ではない。ここではカネテが、時間的にある時から将来を考慮して、その時にまで力を及ぼすことを言い、「予定する」「見込む」「あらかじめ心配する」の意で使われている。こういうカネテの用法は余り現在では耳にしないが、実はこれこそが現在我々が副詞としてしばしば用いるカネテと関連しているものと言える。つまり、現代語では使わない、時間的に先のことを「予定する」意の動詞カヌに、接続助詞テの付いた、連語カネテの転用されたものが副詞カネテであり、上代ですでに、この連語と副詞は併用されていたことになる。

次に現代語の⑤に相当するカネテは、元々カヌの連用形にテの付いた連語ではあるが、必ず動詞の連用形の下に付いて補助動詞的に用いられる。すでに述べたように現代でもよく使われているが、『万葉集』でも一字一音書きの例だけで七例あり、よく用いるものであったことが分かる。左に少し例を掲げておくことにする。

○廣橋を馬越しがねて「我亦言」心のみ妹がり遣りて吾は此處にして（注3）

△一四・三五三八▽

○荒磯やに生ふる玉藻のうち靡き独りや寝らむ吾を待ちかねて「可弥言」

△一四・三五六二▽

○亦繁み慰めかねて「可弥言」ひぐらしの鳴く島陰に應ずるかも

△一五・三六二〇▽

以上、『万葉集』における連語カネテをざっと見て来たが、現代語の④に当たる「兼職する」だけは、例が見つからなかった。ただ、『万葉集』ではなく、『日本書紀』に左のような例がある。

（このいねのまをすつや）

（このいねのまをすつや）

○戊 戌に 納言 兼ねて 宮内卿 五位 舍人 王、病して死せなむとす 〆天武九年七月〰

ここではカネテが、納言と宮内卿という二つの職に就いている意で使われている。よって、上代から「兼職する」意の連語カネテもあったことが分かる。ちなみに『日本書紀』には、カネテとよめるものが他に何例か出て来るが、「事前に」「あらかじめ」の意を表す副詞の例は見当たらなかった。

なお、上代では、カネテは漢字の「豫」または「兼」で表されている。このうち「豫」は、「予」の旧字体で、意符「象（ぞう）」と音符「予（よ）」とから成る形声文字である。原義は「大きな象」で、借りて「前もって準備する」の意に用いるので、漢字そのものに、すでに「あらかじめ」「事前に」の意があったことになる。一方、「兼」は一つの手で二本の禾（いね）を合わせ持ったさまを表す会意文字で、「合わせて持つ」の意を表す。したがって、「合わせ持つ」「一緒にする」「兼職する」の意の連語カネテに「兼」の字が当てられているのは、漢字そのものの意を取っていることになり、問題がない。ところが「兼」は、「あらかじめ」の意の副詞カネテや、「予定する」意の連語カネテ、そして「できない」意のカネテにも使われている。これは、漢字「兼」にはそういう意味がないが、この字は訓でカネテとよむ。そこで、漢字「兼」の持つ元々の意味とは異なるが、音が同じなのでカネテに「兼」を使うようになったものと思われる。つまり、「兼」をカネテとよむのは、漢字そのものは中国にありながら、その表す意味とは別の意味で用いるようになった、いわゆる国字の一種である。

以上、上代のカネテについて概観して来たが、続いて中古の作品の意味・用法について述べることにしたい。

三 中古

今回の調査に当たり、中古の作品としては約二十有余を参照したが、そのうちカネテが最も多く使われていたのは、『今昔物語集』で、計六十五例あった。その他、用例数から言えば、『源氏物語』が四十四例、『宇津保物語』と『采

花物語』が二十七例、『今鏡』十二例、『狭衣物語』十一例で、あとの作品は一桁台だった。なお、用例の中には、副詞か連語か区別のつきにくいものもあるが、とりあえず上代で出て来た「合わせ持つ」「兼職する」「先のことを予定する」の意味を明らかに有するもの、そして動詞の連用形に付いて「：しようとしても出来ない」の意を表す補助動詞的なカネテは、連語として取り扱った。

以下、まず『源氏物語』のカネテの用法を参考にして、これまでにない新しい意味・用法がこの時代に現れたかどうかなどを探ってみることにしたい。『万葉集』には、副詞カネテが五例あったが、そのうち四例までが「知らませば」もしくは「知りせば」という仮定の条件句にかかっていた。『源氏物語』には、条件句にかかるカネテが十四例あったが、それは仮定条件ばかりではなく、順接確定条件、あるいは逆接条件の場合もあった。

○みなかねて思し棄ててし世なれど、宮人どもも抛りどころなげに悲しと思へる気色どもにつけてぞ、御心動くを
りをりあれど・・・
(逆接) △賢木▽

○かかる事もやと、かねて思しければ、中にもことなるは選りとどめたまへるに・・・
(順接) △絵合▽

○御方々、物見に渡りたまふべくかねて御消息どもありければ、左右の対、渡殿などに御局しつとおはす。
(順接) △初音▽

○今日仕うまつりたまふべく、かねて御気色ありけれど、御物忌のよしを奏せさせまへりけるなりけり。
(逆接) △行幸▽

○「後見や何やとかねて思しかはすとも、さしもえはべらじ」
(仮定) △竹河▽

また、『万葉集』の残る一例は「かねて寒しも」という、いわゆる平叙文にかかるものだったが、『源氏物語』にはこの種のものが八例あった。この場合、同じ「時」について述べるにしても、先のことを予測しているので、「あらかじめ」「事前に」の他に「今から」とも訳せるものである。

○「また、さるべき人々もゆるされじかしと、かねて胸痛くなん。

△空蟬▽

○かねてさる御消息もなく、にはかに、かく、渡りおはしまいたれば・・・

△柏木▽

○道のほども、帰るさはいと避けく思されて、心やすくも行き通はざらむことのかねていと苦しきを・・・

△総角▽

次に、既に例示した条件句にかかるものの中にもいくつかあったが、カネテはおおむね、回想・過去・完了などの助動詞と呼応しているものが多い。これは、カネテの意味を考えれば当然のことで、『源氏物語』では、半分以上の二十七例がこれに該当していた。

○かういみじうもの思はしき世にこそありけれど、かねて推しはかり思ひしよりもよろづにかなしけれど・・・

(過去) △明石▽

○鳥には桜の細長、蝶には山吹襲賜はる。かねてしもとりあへたるやうなり。

(完了) △胡蝶▽

○王四位の古めきたるなど、かく人目見るべき折とかねていとほしがきこえけるにや・・・(回想) △椎本▽

以上、意味の面から、先に『万葉集』にあったものや、『源氏物語』で初めて出て来たものについて、いくつか例を

挙げながら述べて来た。続いて用法の面から見ると、非常に目立つのはカネテのすぐ下に、助詞の付いた例が頻出することである。これは上代にはなかったもので、この使い方だと、カネテがまるで名詞と同じように見える。ただし、この場合のカネテが名詞としての機能を完全に有しているかという点、そういうわけでもない、これはあくまでも、副詞の名詞的用法と考えるべきであらう。なお、助詞の中では、格助詞のヨリが最も多く十一例あった。ヨリは時間的な起点を表すので、カネテの意味を考えれば、数が多いのも納得が行く。

○「ただ今北の陣より、かねてより隠れ立ちてはべりつる車どもまかり出づる。」

△花宴▽

○幼き御ありさまのうしろめたさにことつけて、下りやしなましとかねてより思しけり。

△葵▽

○御賀のこと、おはやけにも聞こしめし過ぎず、世の中の営みにてかねてより響くを・・・

△若菜上▽

他にカネテの下に付く助詞としては、モ、ノ、ハ、ソ、シモなどがあつた。最後に左のような例は、これまで述べて来たもののどれにも属さない独特の用法である。

○「出発ノ」二三日かねて夜に隠れて大殿に渡りたまへり。

△須磨▽

ここではカネテが、日数・期間を表す語を受けて、接尾語的に「…以前から」「…前に」の意を表している。このカネテを副詞と取らず連語と考える説も多いが、今まで述べて来た連語の意味の中に、特にこれと合致するものがないので、以下、この種のもものは、あえて副詞と扱うことにする。

以上、『源氏物語』におけるカネテの意味・用法についてざっと見て来たが、他の中古の作品では、これ以外の異なつたものがあるのかどうかを探ることにしたい。その手始めとして、まず『源氏物語』に出て来たものと同じ例をなるべくいろいろなジャンルの作品から選び出し、類別して少しずつ掲げておくことにする。なお、その際、一つだけで

なく、二つ以上のもの（例えば、格助詞ヨリがすぐ下に付くだけでなく、条件句にもかかるもの）が含まれている場合には、適宜一つのグループに入れた。

▼条件句を下に伴うもの

○かねて事みな仰せたりければ、その時ひとつの宝なりける鍛冶匠六人を召しとりて・・・（順接）△竹取▽

○つひにゆく道とはかねてききしかどきのふ今日とは思はざりしを（逆接）△伊勢・一二三▽

○更に御堂の間なん、かねて仰せられ侍りしかば、とりおきて侍る。（順接）△落窪・二▽

○かねてより事々しうなり侍らば、殿上の此彼「我も我も」と出で立ち侍らんも・・・（仮定）△狭衣・一▽

○かなしさをこれよりけにや思はましかねてならはぬ別れなりせば（仮定）△千載・九・五八〇▽

▼平叙文が下に来るもの

○女房にだにかねてさも知らせず、殿上人にはましていみじう隠して・・・（枕草子・九〇▽

○わがせこかくべきよひなりささがにのくものふるまひかねてしるしも（古今・十四・一一一〇▽

○カネテシリテ室ノ中ヲ空クシテタダ一ノユカラノミオケリ。（三宝絵詞・下▽

▼回想、過去、完了などの助動詞と呼応するもの

○おもひやれかねてわかれしくやしさにそへてかなしき心づくしを

(過去) △後拾遺・一〇・五六二▽

○雪にはえて、わざとかねてしたるやうなりけり。

(完了) △今鏡・四▽

○兼テ申サザリケリ。

(回想) △今昔・一二・二二▽

▼格助詞のヨリがすぐ下に付くもの

○かねてより風にさきたつ浪なれや逢事なきにまだきたつらん

△古今・一三・六二七▽

○かねてよりまうけられたる物なれば、いとかめしくけうらなり。

△宇津保・嵯峨院▽

○かねてより上の女房、宮にかけてさぶらふ五人はまゐりつどひてさぶらふ。

△紫式部日記▽

○捧物の用意、かねてより心ことなるべし。

△栄花・八▽

○かねてより女房ふたりばかりものがたりしてゐたりけり。

△古本説話集・上・二▽

▼日数・期間を表す語を受けるもの

○ふた月ばかりかねて、むまれ給はん日まで、ふだんのずはう、よろづ神仏に祈り申させ給ふほどに・・・

△宇津保・蔵開上▽

○いみじき大風ふき、なが雨ふれども、先三日かねてそらはれ土かはくめり。

△大鏡・藤氏物語▽

○足柄といふは、四五日かねておそろしげに暗がりわたれり。

△更級▽

以上、『源氏物語』で見て来た五つの意味・用法別に、他の中古の作品からも少しずつ例を掲げてみたが、これ以外に特別に設けなければならないようなグループは、これといってなかった。よって、中古の副詞カネテは、大ざっぱに右のような分類で収まってしまうと見ていいようだ。

なお、上代ではそこそこ用いられていた下二段活用動詞カヌ（兼）の連用形に接続助詞テが付いた連語のカネテは、中古に入ると、用例数が激減し、特に女流文学における減少傾向が強い。連語カネテは、どちらかというと漢文訓読文で使われている。

○或は生まれながらにして、高弁、兼ねて未事を委り、一たび十の訴を聞きて、一言漏らさず。

△日本書紀・上・序▽

○又喧と静とを兼ねて化せむと欲するが故に、山と城とを両つながら挙げて、国をば摩伽陀と名づく。

△法華経義疏・卷一▽

○「記伝ノ学生、藤原ノ某、兼テハ近衛ノ御門ニ人倒ス蝦蟇ノ追捕使」名乗ルニ・・・

△今昔・二八ノ四一▽

つまり、中古において「事前に」「前もって」の意を表す副詞カネテは、主として和文で使われ、漢文訓読文では、代わりにアラカジメを使っていたもののようである。(注4)

さて、それでは、ここで中古における副詞カネテに関する考察を終了し、続いて章を改めて、中世作品における意味・用法を見ていくことにしたい。

四 中世

先の中世同様、この期も約「千有余の作品に目を通して見たが、前代に比べていちだんとカネテの用例数が増えている。中古では『今昔物語集』の用例数が一番多かったが、中世に入ると、この作品と同じ和漢混交文体で書かれた戦記文学が増える。そこで、必然的にカネテの用例数も増加しているであろう。特に、全体的に長編というところもあるが、『太平記』は、その用例数が百八例もあり、群を抜いていた。(注5) その他、『曾我物語』二十二例、『平家物語』十八例、『義経記』十六例と案の定、戦記文学の用例数が多い。他に、和文作品では、『増鏡』の二十一例、『問はずがたり』の十例が二桁台だったが、あとは軒並み一桁台で少なかった。また、作品ではないが、世阿弥はこの語を好んだらしく、謡曲そして『風姿花伝』『申楽談儀』など、いわゆる十六部集には、狂言などに比べても、意外に用例が多かった。それでは、ひとまず中古で分けた五つのグループ別にその用例を掲げてみることにする。

▼条件句を下に伴うもの

○ かねてこのやうを知らましかば、かかる恨みをばのこさざらまし。

(仮定) △宇治拾遺・二ノ一〇▽

○ かねて内通の子細ありけれども、もし謀りもやし給ふらんとて……

(逆接) △太平記・九▽

○「かねてうけたまはるものならば、などや面々に引出物申さであるべき。

(仮定) △曾我・一▽

○かねてこしらへたる事なれば、走りまはりて火をかけた。

(順接) △義経記・八▽

○御迎かねて御覽せられたれば、今更申すに及ばねども・・・

(順接) △天草本平家物語・四▽

▼平叙文が下に来るもの

○みじか夜の残りすくなくふけ行けばかねて物うき暁の空

△新古今・一三・一二七六▽

○ならはぬ鄙のすまるこそかねておもふもかなしけれ。

△平家・一▽

○「但し、合戦のならひ、かならず一ぱうはかち、一ぱうはまくるならひなれば、かねて勝負しりがたし。

△保元・上▽

○「近づく別れの悲しきにかねてかやうに申すなり。

△太平記・一▽

○座敷をかねて見るとは、これなるべし。

△世阿弥・風姿花伝▽

▼回想・過去・完了の助動詞と呼応するもの

○「かねて思ひしより、いみじく心も澄みてたのもしく侍り。

(過去) △発心集・三ノ五▽

○孔子思ひ給ふ。かねても聞きしことなれど、かくばかりおそろしき者とは思はざりき。

(過去) △宇治拾遺・一五ノ二二▽

○佐々木三郎、案内はかねて知つたり、滋目結の直垂に黒糸威の鎧きて・・・

(完了) △平家・一〇▽

○サテツカサメシノ事ラバ、兼テヨク思食サタメラレケリ。

(回想) △十訓抄・三ノ二三▽

○名を聞くよりやがて面影は、推しはからるる心地するを、見る時はまたかねて思ひつるままの顔したる人こそなけれ。

(完了) △徒然草・七一▽

○さる程に、東にもかねて心しけるにや、尊氏の末の一族新田小四郎義貞といふ物、今の尊氏の子四になりけるを

大將軍にして・・・

(回想) △増鏡・一七▽

○或人、そこを通つたが、豫てその事を知つたか・・・

(過去) △天草本イソボ▽

▼助詞ヨリがすぐ下に付くもの

○女院も通盛の卿の申すとはかねてより、知ろしめされたりければ、さて此文をあけて御覽するに・・・

△平家・九▽

○かねてより阿弥陀峰に陣を取りたりし阿波・淡路の勢千余騎・・・

△太平記・一七▽

○「祐成が心も、かねてよりしりぬらん。

△曾我物語・九▽

○かねてより棧敷などもいみじうつくせり。

△増鏡・一六▽

○いやさやうの義はかねてより申して御さる。

△狂言・柱杖▽

○此人々「かねてより響引出物取り給ふ」とて笑ひ給ふ。

△御伽草子・文正さうし▽

▼日数・期間を表す語を受けるもの

○田舎のものは、仏供養し奉らんとて、かねて四五日よりかかることもをし奉るなり。△宇治拾遺・九ノ五▽

○「三日かねてよりつほねつほねにしこうして・・・

△問はずがたり・二▽

以上、中世における副詞カネテの用法について述べて来た。グループ別では、日数・期間を表す語と共に使われ「前に」の意を表す接尾語的用法が極端に減つてはいたが、あとは中古とほとんど変わりがなかった。ただ、特にこの期になって目立って多くなったのは、助詞ヨリがすぐ下に付くもので、『太平記』では、約四分の一に当たる二十六例がこの形をとっているほか、他の作品でもこの類のものは多かった。

また、連語のカネテについていうと、中世では和漢混交文体の作品が多いので、中古文学ほど少なくはなかった。例えば、「合わせ持つ」「一緒にする」の意を持つカネテとしては

○太上天皇一戦の功を感じて、不次の賞を授け給ひしよりこのかた、たかく相国にのほり兼て兵杖を給はる。

△平家・四▽

○これひとへに、皇統の無窮を輝かさんための御願、かねては六趣の群類の冥闇を照らす慧光の法燈の明らかなるに思し召しなぞらへて・・・

△太平記・五▽

○智・仁・勇の三つの徳を兼ねて、死を善道に守るは、古へより今に至るまで、正成程のものはいまだ無かりつるに・・・

△太平記・一六▽

などが、また「兼務する」の義を有するものには、

○不兼「大将」之大臣候「御劔」之事、無例歟。

△古事談・一▽

○しかのみならず、その門葉たる者は、諸国の守護・吏務を兼ねて銀鞍いまだ解けざるに・・・△太平記・一九▽

○梨本・大塔の面跡を兼ねて・・・

△太平記・三〇▽

などが、そしてこれは、歌に多い類型的表現であるが、「予定する」「見込む」の意を示すカネテとしては

○すずしさにちとせをかねてむすぶかな玉井の水の松のしたかげ

△続拾遺・一〇・七六二▽

○君が代に千とせをかねてすみた川かりにもあだの影はうつらず

△続後拾遺・七・五二▽

○花の色は千とせをかねていにしへのためしにまさる春にもあるかな

△新千載・二〇・二三三▽

○薤田に千とせをかねて住む鶴も君がよはひにしかじと思ふ

△新拾遺・七・七三▽

○小鹿の角の束の間に千歳を兼ねて契り給ふ。

△太平記・三七▽

などがその例として挙げられる。さらに、動詞の連用形に付く補助動詞的用法のカネテは、中古でもそれ相当に使われていたが、中世でも他のものに比べると、その用例は多い。

○ふかみどりあらそひかねていかならんまなく時雨のふるの神杉

△新古今・六・五八一▽

○待ちかねて遠くよりきたるものは、帰りなどして、川原人ずくなになりぬ。

△宇治拾遺・一一ノ九▽

○入道、猶腹をすゑかねて、「経還、兼康」とめせば・・・

△平家・二▽

○家ヲ尋カネテ通所ヲ聞出テ告タリケル。

△十訓抄・一〇ノ二七▽

○縁へ上がらんとしけれども、上がりかねて「誰か御わたり候」と申しければ・・・

△義経記・四▽

○北条尋ねかねて、すでに下らうとすると・・・

△天草本平家・四▽

そして、左のような連語カネテの例は、中世に入ってから出て来たものである。

○聖人ハ心ナシ。萬人ノ心ヲ以テ心トストイヒテ、人ノ心ヲカネテ民ノワツラヒヲ思給ケレ。 △沙石集・三▽

○虎は又十郎が心をかねて、衣ひきかつきうちふしぬ。 △曾我物語・六▽

○十郎が心をかねていでさるさへ、やさしくおぼゆるにや。 △曾我物語・六▽

いずれも似たような使い方であるが、この場合のカネテは、今までのものとは違い、「心」に対して「気がねして」「遠慮して」「憚って」などの意を表している。よって、これはこの中世に入って、初めて出て来た連語カネテの新しい意味になる。それだけ、連語カネテが、これまでよりも意味・用法の上で、広がりを見せたということになるだろう。以上、その都度いくつかの例を挙げながら、中世における副詞カネテの意味・用法について考察を加えて来たが、最後に全体をまとめることにしたい。

五 おわりに

これまで全部で四つの章に分けて、副詞カネテを取り上げ、通時的にその意味・用法を調査して来た。まず、現代語のカネテの用法をざっと見て、それがいつ頃から使われ出したのかを探ってみたところ、すでに上代で「あらかじめ」「事前に」などの意を表す副詞カネテのあることが判明した。さらに、連語についても調べた結果、現在耳にする「一緒にする」「兼職する」、そして動詞の連用形に付いて「…しようとしても出来ない」「…していることに堪えられない」の意を表す補助動詞の用法のカヌは、いずれも上代から使われていた。その他、「予定する」「見込む」の意を表

すカヌが上代から存在し、その連用形に接続助詞テの付いたものが、副詞カネテの起源であるとわかった。なお、この連語カネテは、現代語ではほとんど用いない。前章の中世では、使用例が歌に多く、非常に類型化している旨述べたが、これがその前の中古でも同じように歌の中で、意外によく使用されている。

○梓弓いそべのこ松たが代にかよろづよかねてたねをまきけん

△古今・一七・九〇七▽

○新しき年の始にかくしこそ千年をかねてたのしきをつめ

△古今・二〇・一〇六九▽

○水そこの色さへふかき松がえに千年をかねてさける藤浪

△後撰・三・一二四▽

○松のこけ千とせをかねておいしげつるのかひこのすをもみるべく

△拾遺・一八・一二六七▽

要するに、「予定する」の義を有する動詞カヌに接続助詞テの付いたカネテと、そこから生じた「あらかじめ」の意を表す副詞カネテとは、上代・中古・中世とずっと併存していたことになる。そして、それを証明する事にもなるが、十七世紀の初めに成った『日葡辞書』を見ると、動詞カヌは三方所に分けて左のように載っている。いずれも活用は同じ、Cane, uru, eta (カネ, ヌル, ネタ)であるが、意味は

① (予ね、ぬる、ねた) 用意する

② (兼ね、ぬる、ねた) 何か事をするのが困難である。この動詞は多くの語根(連用形)の後に続く。

③ (兼ね、ぬる、ねた) 二つのことにたずさわる。

の三つに分かれている。つまり、これまで述べて来た「一緒になる」「兼職する」のカヌが③に、動詞の連用形に付き「……しようとしても出来ない」の意を表すカヌが②に、そして①は「予定する」「見込む」の意を表すカヌに相当す

る。結局、上代ですであつた連語のカヌは、『日葡辞書』でもしつかり用い続けられていたことになる。そして、同書には、副詞のカネテについても左のように出ている。

Canete

カネテ(予て)

副詞

前もつて

▼ Aracajime

その後、近世に入ると、副詞のカネテについては、西鶴・芭蕉・近松などの作品に例がある。

○兼て聞及びし様子見るに・・・

(過去と呼応) △好色一代男・三▽

○兼て才覚らしく見えければ・・・

(条件句にかかる) △好色五人女・二▽

○兼て耳驚かしたる一言開張す。

(完了と呼応) △奥の細道▽

○是なふかねて申せし夕霧のこと・・・

(過去と呼応) △夕霧阿波鳴門▽

○中居の玉はかねてより茂兵衛に心をかけ命も捨んと思ひこむ。

(助詞ヨリが下に付く) △大経師首曆▽

○しぬるはふたりがかねてのかく。

(平叙文にかかる) △心中宵庚申▽

右のように副詞カネテは、近世でも中古・中世と同じような用法で使われていたことになる。ところが、連語カネテは、今回私が調査したところ、その例が見つからなかった。ただ、一八六七年刊行の『和英語林集成』を見ると、副詞のカネテと連語のカネルが共に立項されている。よつて、連語カネルは現代でもその用法が残っていることから推して多分近世でも用い続けられていたのであろう。ただ、副詞カネテの元となった「予定する」「見込む」の意の連語カネ

ルについては、同書にも明記されていない。結局、上代・中古・中世と歌の中で類型的に使われていたこの意の連語カネルは、現代語でもほとんど耳にしないので、副詞カネテに一本化し、近世ではすでに消滅していたのかも知れない。尚、カネテの同義語にアラカジメがある。この語は上代でこそ例が出て来るが、中古以降はもっぱら漢文訓読文で使われるようになる。（注4参照）ただ、古辞書類にはずっと掲げられているので、和文では用いなくても、語としては存在し続けていたのであろう。『日葡辞書』にはカネテの参考項目として挙がっているし、現代でもむしろカネテよりも一般的に使用されているように思われるが、どうであらうか。

以上、副詞のカネテに関して種々述べて来たが、大方のご叱正を期待して、ひとまずこの辺で筆を揃くことにしたい。

注1 以下、定本に用いたのは、公刊の索引類を元にしたので、大半が旧岩波古典文学大系本になる。

注2 他に二つ、カネテの例を挙げる本もある。

二二五

○ かからむの懐知りせば大御船泊てし泊りに標結はましを 八二・一五二V

の「懐」が「豫」となっている本があるので、ここをカネテとよむ説もあるが、これは初句の「かからむの」の「の」が「乃（の）」とあり、これを「刀（と）」とした上での考え方。ところが、「乃」は乙類、「刀」は甲類の漢字なので、「乃」を「刀」の誤りとすることは出来ない。したがって、「かからむの」と来れば、カネテにかかる事はなく、ここは定本通りにとるべきであらう。もう一例八九・一七三八Vもカネテとよむ本があるが、ここも定本に従い、アラカジメととった。

注3 原文は「我你言」で、濁音化しているが、これは、二番目の音節がネという鼻音の音節なので、その影響を受けてカが濁音化したものと思われる。

注4 『平安時代の漢文訓読語につきての研究』（築島裕・東京大学出版会・一九六三年）四六六ページ参照。

注5 『太平記』は十井本（本文及び語彙索引・勉誠社・一九八七年）による。

注6 中古のシノフ（僊）に関しては、第三音節の清濁がはっきりしないが、以後用例表記に際しては、便宜上シノフと濁音で記すことにする。なお、上代および中古の用例は、公刊の索引類をもとに、主として岩波書店発行の日本古典文学大系本（旧版）を用いた。